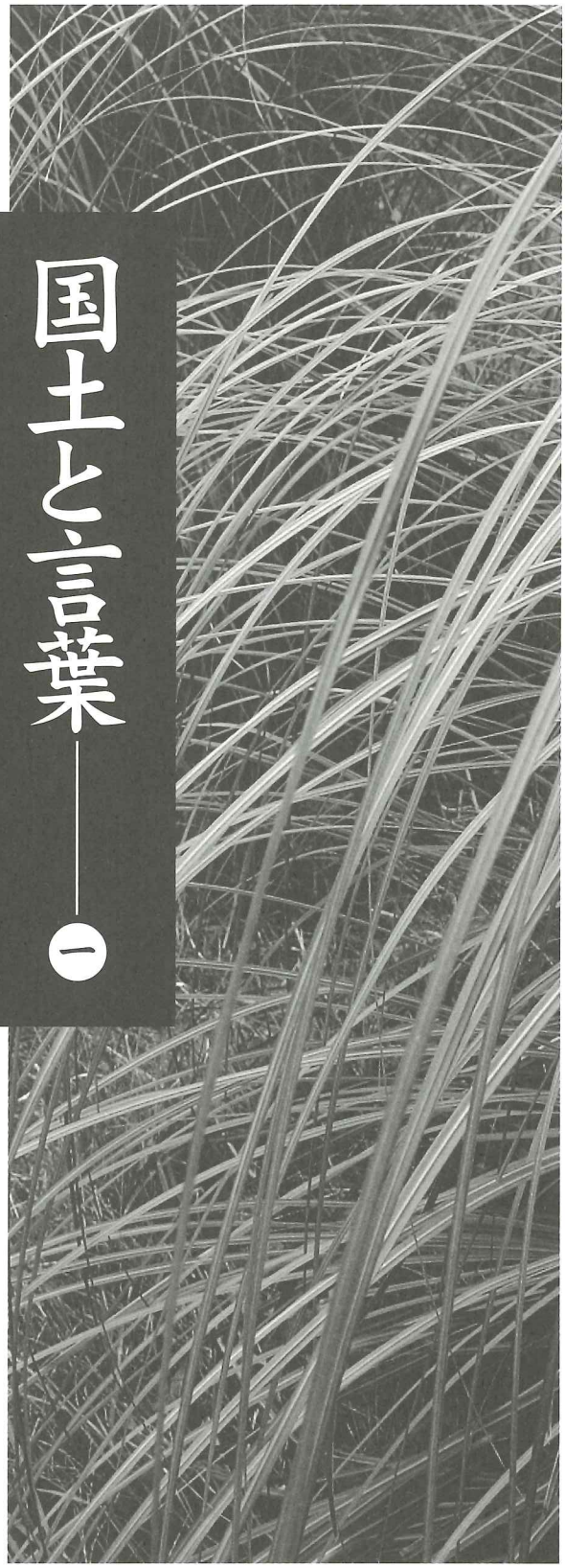

国土と言葉——一

本多弘之
honda hiroyuki

仏教の考え方では、諸仏には各々一つの国土があると言われる。すなわち一仏土に一人の仏陀が在(ま)しますとされているのである。そしてその各々の仏土において、それぞれ衆生を済度しているという。そして諸仏は平等のさとりに住して、「各々安立」しているともいう。

こういう表現には、さとりを開いた仏陀同士の関わりという問題関心がないようである。だから、仏陀同士は互いにぶつかることもない代わりに、特別に親しく共同作業をするというような方向をもっていないようにも思われる。

この原型は、スッタニパータにある「汝らは、ただひとりして歩め、犀の角のようにひとりして歩め」(『ブッダのことば』岩波文庫、「犀の角」章を参照)という教えに代表されるような、仏道を求めるものは独立自尊の姿勢を追求せよ、とするところから来るように思う。そもそも世俗の人間関係を離れて、出世間において解脱せよ、ということが仏陀の教えの出発だったからでもあろうか。

ところが、『大無量寿経』が語り出す法蔵願心には十七願があって、「諸仏に我が名を称えてほしい」(趣旨)ということが願われている。その願を、阿弥陀自身を成り立たせる願であるとして、「摂法身(しょうほっしん)」の願であると、浄影寺の

慧遠は押さえている。この願と、十二願（光明無量の願）、十三願（寿命無量の願）の三願によって、阿弥陀は阿弥陀自身の内容を成就するのであると。そうであるなら、阿弥陀なる如来は、諸仏の証明を待って自己自身を成就するのだ、ということであろう。

しかし、その三願のなかから十七願を取り出して、単に阿弥陀自身の法身の内容に止めず、衆生に自己を与えて衆生を済度するはたらきとなるのだ、といただいたのが親鸞であった。阿弥陀の救いを光明の摂取に感受するのみでなく、阿弥陀自身が衆生の上にはたらく「行」となって、衆生を救いとろうとするもの、それを「大悲回向の行」であるというのである。願心自身が具体的なかたちをとって、衆生に自己を与えるのだというわけである。

その願には、「諸仏咨嗟」を誓っていて、「諸仏によって、自己の名前を呼ばれたい」という。そのことが、諸仏による阿弥陀の願への賛同と賛辞なのだ、ということなのである。それは、この願の成就の文に、「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功徳不可思議なるを讃嘆したまう」（『教行信証』「行巻」）とあるからである。阿弥陀の名を称することには「讃嘆」という意味がある、というのである。これによって親鸞は、この願を、「大行」の根拠であると決定した。阿弥陀の願いに諸仏如来が賛同し、その御名を称揚讃嘆しているから、その現行を「大行」であるとした。

そもそも名が行である、ということは一般的ではない。弥陀の本願の独自の内容である。それは、一切の衆生を仏道の成就に導かんとして、大悲の願心が選び取った方法なのだ、ということである。だから、この名は、名をとおして一切の衆生を成仏させたいという本願の具体的なかたちだということである。それによって、名が現に思い起こされ、称えられているところには、弥陀の本願が現前しているのだ、現行しているのだ、弥陀の願心を現にいま、興起せしめているのだ。それは、阿弥陀の願を証誠する「諸仏称揚」の事実の現前なのだ、というのである。それは無限なる如来自身が自己を有限なる名として表現して、衆生の称名となっているからだ、と親鸞は了解したのである。

衆生とは、一応は未だ成仏していない位を表す。いな、凡夫から菩薩、仏を包んで「一切衆生」というのかもしれない。凡夫が、仏法に触れて菩提心を起こせば、「菩薩」としての歩みを始める。その菩提心を成就すれば、成仏である。しかし、「諸有の衆生」というなら、「流転の状況にある衆生」ということである。そういう仏教の人間観からするなら、仏の本願に適って、その願を証明するような衆生は、「因位の仏」だと言えるのであろう。未来に必ず成仏するものを因位の仏という。阿弥陀なる大悲の仏から見るなら、自己の願に賛同するものは、きっと成仏すると決定してくださるのであろう。

仏陀の無限なる功徳は、それに触れる衆生に大いなる功徳をもたらす。そのはたらきは、あたかも環境が、そこに生きるものに大きな影響を与えるごとく、仏陀の功徳から出てくるはたらきが、衆生の生活に浸透してくる。そのかたちなき育成のはたらきを「光明」と言うなら、それに触れて感得される如来の暖かいはたらきを「回向」と言うのであろう。それが「如来から、回らし向けられた功徳」だからである。そして回向を潜るとき、果の位にあった如来の功徳は、因の凡夫にはたらくものとなって、衆生の位のかたちとして具体化する。果を成就した如来の大悲が、衆生を包むために、因の位のかたちとなるというわけである。

本来、仏教の立場は「因果一如」と言われる。一如なるものを因の衆生が分別して、因果に分かつのである。だから、それに付随して、如来が衆生のなかに功徳を「回向」して、因のかたちを恵むと教えるのだというのである。

（ほんだ　ひろゆき・親鸞仏教センター所長）